

「一」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

小学校五年生の春日（後に吉岡）隆徳は、夏休みに学校の校庭で短距離走のトレーニングを始めた。自分なりに工夫してスピードが増すと心に自信が芽生えた。そのころ六年生にオロチの千太郎を中心とする四人組がいて、悪さばかりしていた。八月の暑い日、隆徳が練習をしていると、四人組は足の不自由な少年をいじめている。

その光景を見ているうち、隆徳には自分が甥をいじめた幼い日のことが思い出されてきた。母の悲しそうな顔、そして父の今まで見たことのないようなおこった顔がつぎつぎと思いうかんだ。いじめは相手や周りの者たちを傷つけるだけではない。いじめた当人の心もいつのまにかすさんでしまう。自分より小さくて弱い者をいじめたりするのは、人間としても最低のことなのだよと、あのとき、父は幼い隆徳に言いきかせ、わからせようとした。隆徳は気がつくとも四人組にむかって走り出していた。

……やめろ、やめろ。お前が出て行ったってなぐられるだけだぞ。心のなかでもう一人の自分が一生けん命に止めにかかる。だが隆徳の足は砂場めがけてバネじかけのようにはねて行く。

……やめろ、やめろってば、やめろよ！

自分に言い聞かせていた言葉がふっと口をついて出てしまった。隆徳はギョッとなって立ち止まった。

「なに、おれさまに何言うだあ」。親分格のオロチの千太郎が、隆徳をにらみつけた。隆徳の胸はドクドクと鳴った。

「やめて、やめて、あ、あげてごしなはい」。隆徳はか細い声でもう一度おずおずと言った。ひざががくがくとふるえた。「やかまし、ひっこんどけや」「そげだ」「そげだ。お前もここにぶらさげてやーか」。ほかの三人もかん高い声でつづけた。

足の不自由な少年は鉄棒にぶら下がったまま、不安そうな顔で隆徳を見下ろしている。

「こら、お前は降りれ。こいつ生意気だけん、先にケリつけちゃーけん」。

千太郎は鉄棒のほうにチラリと目をやると、向き直ってゆっくり隆徳のほうへ足を向けた。

「おれさまは梅津千太郎。オロチの千太郎といえはこの辺ではちったあ知られた名前だけんの、お前はだーかや？」

「春日……隆徳」「たかよし、ほんならこっち来いや。一対一で勝負さこい」。

オロチの千太郎と名のつた少年は隆徳の前に立ちふさがり、仁王立ちになった。隆徳より身体も大きく、腕力わんりきもありそう問二アだ。そのオロチが胸ぐらをつかもうと手をのばしてきた。とっさに隆徳は一步あとずさった。一瞬しゅん、ひとつの考えがひらめいた。次の瞬間、自分でもおどろくほどの大きな声で言った。「一対一だなんて、一対四なら勝負してもえよ」「なにい」。千太郎は意外な反応のうにいきり立った。そして子分をふりかえって、目で合図した。

「ええで、やっつけちゃらい」。

千太郎はこしゃくなやつめ、と低く言うのと、子分の三人も砂をけて前に飛び出した。

問七 「待てや」。千太郎は子分を手で制すると、隆徳をにらんだ。「どげなつもりだ」「一対四で勝負を決めよう」。

隆徳はもう一度くりかえした。どこからこんな度胸がわいてくるのか自分でもわからなかった。ただ千太郎の目をまっすぐ見て、「ここからあすこの体育倉庫まで駆ける。最初にとびらにさわった者が勝ちだ」と早口で言った。「駆けやこか、ええ根性だ。よしっ」「ぼくが勝ったら弱い者いじめはするなよ」。千太郎に念をおすように言った。もう、ふるえはなくなっていた。「そのかわりおらんちが勝ったらおまえはおらの子分だじよ、えかや」。

問八 オロチの千太郎は、もう走り出すかのように、大きな身体をブルブルさせながら、隆徳をにらみつけた。

「えよ。きみい、鉄棒から降りてスタートの合図あいをしてごせよ」。

隆徳は、さっきからずっと鉄棒にぶら下がったまま、なりゆきをみていた少年に声をかけた。それから、つま

先で砂場にぐいとスタートラインを引いた。

五人の少年はラインの前に思い思いのかっこうでスタートの構えをした。隆徳一人がまっすぐに立ってゴールのとびらを見つめている。距離にして一〇〇メートル、いや一二〇メートルはあるだろうか。

「ヨーイー」。少年は足を引きずりながらスタートラインの横に立った。足が不自由なために肩かたがななめになっていたが、せいっぱい胸を張って、合図をはじめた。さっきより夕日の色がいっそうこくなっていた。千太郎たちの間に緊張きんじやうが走る。少年は片手を高く上げた。バランスをくずした身体がゆらりとゆれる。身体がしずまるのを待って、さっと手を下ろした。

「ドン!」。四人組はオロチの千太郎を先頭にいっせいにスタートを切った。包丁の勇吉むしきち、足けりの忠助、ゲンコツのマサがその後に続く。だが隆徳はスタートラインに立ったまま少年に笑顔を向けた。

「きみ、名前は？」。

少年は目を丸くして、隆徳をみつめていた。なぜ走らないのだろう、もしかしたらこのままにげ出すのだろうか。少年は小さな声で、ぼそつと言った。「駆けらんかね? あいつの子分にされーよ」。隆徳はそれにはかまわず、「ぼくは、かすが、たかよし。きみは?」「田所……信博のぶひろ」「信博くん、見ろよ。きみの合図であいつら駆け出したんだ、まるで、きみの子分になったみたいだね」。隆徳は走っていく四人の背中を指差してゆかいそうに笑った。

「ほんなら、おれ、ちょっとこし行ってくー」と言うなり砂をけて疾走しっしした。そしてあっという間に彼らに追いつくと包丁の勇吉、ゲンコツのマサ、あごをつき出して腕うでをふりまわしている足けりの忠助を、次々に追いぬいて行く。そして次の瞬間、先頭の千太郎を追いぬきざまにチラリと見ると、赤い顔が引きつっていた。隆徳はまるで風のように走りきり、体育倉庫のとびらを両手でバンとたたいた。

夕日が今まさにしずみかけようとしていた。四人の少年たちは肩で息をさせながら、地面にヘタリこんでしまった。

「たかよし。お前にはんげんだない、馬か天狗だあ」と、千太郎がはあはあとあらい息をはいている。油ぜみがジージーと油をあげるような声で鳴いていた。

このときから隆徳は「馬」か「天狗」と呼ばれるようになった。そして、この日を境に四人組が信博をいじめることもなくなった。小がらな隆徳は一級上の彼らに一目おかれるようになったのである。

吉岡は笑い声をあげると、さらに昔話を続けた。

例の四人組の一件がきっかけとなって隆徳と信博が親しくなったこと。自分の心のどこかに片足が不自由な信博に同情する気持があったこと。そして卒業まぢかなある日信博のもらした一言が、隆徳の心を一変させたのである。

それはいつものように校庭を走り回ったあとのことであつた。砂場にいた信博に、思わず、こう言った。「ひる坊も、ぼくと一緒に走れたらなあ」。信博は鉄棒にぶらさがったまま、「天狗が、本物の天狗になったらわ」とつぶやいた。「そうだろ。このところ調子がいいんだよ」「救いようのない天狗だ」。

信博はにこりとしなかった。それが皮肉だとわかつた隆徳は顔色を変えて問い返した。

「どういう意味だ、もう一度言ってみろ」。

答えによつては許さない。ところが信博はなぞかけのようなことを言つて、にこにこ笑い返した。

「あのね、足の力は手の力。手の力は足の力。天狗は走っているばかり、ぼくみたいに腕の力をつけようとしな

問十一

いよね」「なんだと！ 鉄棒にぶら下がっているしかないやつがえらそうに言うな」。隆徳はくやしきまぎれにさけ

んだ。「じゃ、ぼくと決とうだ！ 天狗、逆上がりの回転勝負だ」。

信博はそういうと、両腕を曲げてあごを鉄棒に近づけると両足をいっきにふり上げた。そして反動をみごとに生かしてくるりくると鉄棒をじくに回転をはじめたのだ。隆徳は円をえがいて鉄棒を回転する信博の姿をあつけにとられて見つめていた。

吉岡は笑いながら、佐々木にこうつづけた。

「いや、おどろいたよ。足が不自由なのに目にも止まらぬ速さで回転するんだ。何十回まわつただろうか。それじゃ、つて言うんでぼくも挑戦してみたけど、ダメだった。三回転もできない。でね、その子が言うんだ」。

「ほう」。佐々木は空の牛乳びんをバトンのように持ちかえると、吉岡の顔をじつと見た。

「手も足も脳が動けと命令しているんだ。だから足をきたえたら手もきたえる。片方だけじゃダメなんだ。だから今の天狗は足の動かないぼくとちつともかわっていないんだってね。正直、ぼくはハッとした。その子に同情しかしていなかった自分がはづかしかった。今のぼくの練習法はあの時のことがヒントになっているんだ」。

「なるほど……」。佐々木は思わずうなった。

「その子の父親は医者でね、足の不自由な息子をそうやってはげましていたのだ。やがては日本にも車椅子がふきゅうする日が来る。そのときのために腕に力をつけておけということだったらしい。だけど、病気で死んでしまった」。

吉岡の目にうつすらなみだがうかんだ。なみだを見せまいと、顔を横にそむけた。佐々木はだまったまうなずいた。

「その子はね、ぼくにこう言うんだ。将来はきっと車椅子で競走する大会ができるはずだ。それにぼくは参加す

るんだって、目をきらきらさせて言ったんだ」。

吉岡は言葉をとぎらせると空を見上げた。白い雲がぼっかりとうかんでいる。郷里の島根の空にうかぶゆう大な雲のみねが二重映しになって見えた。

「その日以来、^{問仕}ぼくは信博の子分になったんだ。グラウンドを走る前に必ず信博と鉄棒をするようになったというわけさ」。

(辺見じゅん『暁の超特急』)

問一 ―― 部ア・イと言葉の働きが同じであるものを選びなさい。

ア「腕力もありそうだ」

- 1 Aさんは今年南の国に行きたかったが、夏はむし暑いそうだから冬に行くことにした
- 2 B君は慣れないコンピュータの操作がわからなくなり、そうだ、兄に教えてもらおうと思った
- 3 C君は、明日は晴れそうだから久しぶりに山登りをしようと地図を見ながら計画を立てている
- 4 劇の発表会で主役をつとめることになったDさんは、真っ赤な衣装を自分で作るそうだ

イ「力をつけておけということだったらしい」

- 1 この一か月の間、ダム周辺では雨らしい雨が降っておらず、夏の水不足が心配される
- 2 久しぶりに会った兄だったが、急いでいるらしく、しきりに時計ばかり気にしていた
- 3 コンクールで入選した妹の詩は、いかにも子どもらしいすなおな作品とひょうばんだった
- 4 にくらしかったあのころのガキ大将も、三十年たった今では立派な紳士になっている

問二 ―― 部「だが隆徳の足は砂場めがけてバネじかけのようにはねて行く」とありますが、「バネじかけの

ようにはねて行く」という表現で作者はどのようなことを言おうとしているのですか。

- 1 隆徳は助けになど行きたくなかったが、また父におこられるのがいやで仕方なく助けに行くこと
- 2 少年を助けなければという気持と千太郎をおそれる気持とが隆徳の頭に交互にうかんでくること
- 3 日ごろのトレーニングによって、隆徳が目にも止まらぬ速さで走れるようになってきていること
- 4 隆徳が自分の意志ではコントロールできない不思議な力につき動かされて少年を助けに行くこと

問三 ―― 部「自分に言い聞かせていた言葉がふっと口について出てしまった。隆徳はギョッとなって立ち止まった」とありますが、このときの「隆徳」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 自分に十分言い聞かせてから相手に言わなければならないと思っていた言葉をとっさに口にしてしまい、思いがけない展開にとまどっている
- 2 自分に向かってしか言うつもりでなかった言葉をついっかり相手に向けて言ってしまう、今さらながら自分の口の軽さにあきれている
- 3 自分で自分を説得しようとしていたはずの言葉がいつの間にか相手を制止する言葉になってしまい、ぐあいの悪い事態になったことにおどろいている
- 4 自分を納得させようと自分に向かって言っていたはずの言葉が誤って相手を傷つけることになってしまい、気まずい状況ようになったことにあわてている

問四 ――部「隆徳はか細い声でもう一度おずおずと言った」ときの「隆徳」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 腕力のありそうな千太郎ににまれおびえているが、いじめはよくないし、一度やめろと口に出してしまった以上後に引けなかった
- 2 悪さばかりしている千太郎には近づきたくないが、いじめはゆるされることではないし、人間としても最低だという父の教えを守りぬこうとした
- 3 日ごろおそれている千太郎がこわくてにげ出したくなったが、千太郎にいじめが悪いことを知らせようと決心したので、必死でやめさせようとした
- 4 声の大きな千太郎にどなられてこわくてたまらなかったが、いじめは悪いことだと知らない千太郎が気の毒なので、それとなくさとした

問五 ――部「向き直ってゆっくり隆徳のほうへ足を向けた」とありますが、なぜ「ゆっくり」したのですか。

- 1 自分に逆らってくる相手の出方をじっくり観察するために、時間をかせごうとしたから
- 2 自分より弱い相手に指図されて腹を立てたことを、なんとかとりつくろおうとしたから
- 3 子分たちが自分に加勢してくれるので、気を大きくして相手にけんかをしかけようとしたから
- 4 自分のほうが強いと確信しているので、相手によゆうのある態度を見せつけようとしたから

問六 ――部「ひとつの考えがひらめいた」とありますが、「ひとつの考え」の内容を、二十字以内で具体的に書きなさい。

問七 ――部「『待てや』。千太郎は子分を手で制すると、隆徳をにらんだ。『どげなつもりだ』」とありますが、一度は子分にやつつけることを合図した「千太郎」がこのような行動をとったのはなぜですか。

- 1 隆徳の潔い態度に感心し、親分として相手の意向をしっかりと受け止めるのが礼ぎであると考えたから
 - 2 大きな勝負をいどんできた隆徳がただ者ではないと感じ、隆徳の考えていることが知りたくなったから
 - 3 自分の提案がききひされたのでいかりが強まり、どうしても自分一人で隆徳をやっつけたくなったから
 - 4 予想外の反応を見せた隆徳が悪だくみをしていると感じ、まともな勝負をされた方がよいと思ったから
- 問八 ――部「オロチの千太郎は、もう走り出すかのように、大きな身体をブルブルさせながら、隆徳をにらみつけた」とありますが、このときの「千太郎」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 あさはかな申し出をする隆徳におどろきを覚え、負けたくないという気持をわき上がらせている
- 2 生意気な隆徳に自分の強さを思い知らせてやろうと、勇み立つ気持をおさえきれないでいる
- 3 隆徳の落ち着きはらった態度をうす気味悪く感じ、ひるみそうな自分を奮い立たせている
- 4 自信に満ちた隆徳の態度におじけづいているが、子分の手前それをかくそうとからいばりしている

問九 ――部「馬か天狗だ」とありますが、「馬か天狗」とは、どのようなことをたとえたものですか。簡単に書きなさい。

問十 ――部「天狗が、本物の天狗になっとるわ」とありますが、「本物の天狗になっとる」について次の問に答えなさい。

① 「隆徳」ははじめどのような意味だと思いましたか。

② 「信博」はどのような意味で言いましたか。

問十一 ――部「足の力は手の力。手の力は足の力」とはどういう意味ですか。二十字以内で書きなさい。

問十二 「ぼくは信博の子分になったんだ」(~~~~部B)の「子分」と、「そのかわりおらんちが勝ったらおまえはおらの子分だじよ」(~~~~部A)の「子分」とはどう違うのですか。百字以内で書きなさい。

「二」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

日本人の応答は、どうやらないへん高級なようだが、この高級さの正体は何なのだろう。以前、私は政府の国語審議会の委員を三期つとめたことがある。そこでの大きな課題の一つは、敬語の表現をどう考えるかであった。敬語が日本語にはたくさんあって、複雑で、外国人泣かせであることは、よく知られている。

もちろん外国語にも、相手を尊敬した表現はたくさんあって、日本語だけのものではない。委員のなかには「敬語は日本語独自の美風だ」などと言う人がいて、私はぎょう天した。

じつはつい最近、私はヨーロッパの小旅行の途中、バスの座席に幼子を座らせようとして、父親が「プリーズシットダウン」というのを小耳にはさんで、気持よかった。ただ「シットダウン」だけでもいいのに。

また、上等な人ほど表現は丁寧である。人にもものをたのむときも遠回しに言い、プリーズばかりか「for me」を加えたりする。

だから日本語に敬語が目立つというのは人種が上等なだけだ(一)。

さてその上等ぶりは、どんな内容なのか、いろいろあるなかでまずとり上げるものとして、「させていただく」という言い方がある。「どうぞ、どうぞ」と椅子をすすめられると「ありがとうございます。座らせていただきます」と言う。「じゃ座ります」などとは言わない。

「いっしょに帰りませんか」。「はい、おともをさせていただきます」。要するにこれは相手の行動によって自分がそうさせてもらうという意味だ。自分を椅子に座らせるのも相手。相手といっしょに帰っても、対等に行動をとみにしているのではなくて、相手は自分を供として従える。そのように自分をさせる、と考えるのである。あくまでも相手が主で、自分はそれに従っているにすぎない。

これは、自分から進んでやるばあいでもそうだ。「本日司会をつとめさせていただきます田中です」と言って、司会^{問一b}は自分から口を切る。とつぜん客席から声があがって「つとめさせたのはだれだ」と聞くわけでもない。みんな当然のように聞いている。

いや、いちいち聞きさえもしないほど、あたりまえの表現であろう。つまり、それほど^{問三} A のが日本語だということになる。先ほどから問題になっている高級さとか上等さとかの中身は、じつはこの相手への尊重であった。

そこで念のためだが、相手への尊重を、封建的なものとか、階級意識とかと誤解しては困る。

そもそも日本語の敬語は、最初は親愛の気持をあらわす方法だった。八世紀のころはそうである。

それがやがて敬愛の気持をあらわすようになり、やがて尊敬の気持の表現となった。

そのうえでも、尊敬するかどうかは個人の自由だから、階級と見合うものではなかったが、一部で階級と敬語が一致してしまった。^{問四}

そのばあいでも、心のなかで尊敬してもいないのに敬語を使うと、それこそ、いんぎん無礼になる。^{問五}

だからあくまでも敬語は相手を愛する気持の表現方法なのだ。愛は尊敬がなくては生じない。尊敬の気持のない愛があつたら、お目にかかりたい。それがごく自然に出ているのが本来の敬語、さっき親愛をあらわすといったものだ。

だからそもそもその敬語は女性に対して発せられた。そもそも日本人の女性のあつかいは、愛と尊敬にみちていたのである。

敬語が階級制を反映したものだなどと考えることが、いかにまちがっているかがよくわかる。

現代日本人が、もし敬語など必要ないというのなら、他人を愛する必要はないという発言をすることになる。

いや、敬語なんか使わなくても、愛の気持は伝わるという反論もあるだろうか。

もちろん、そういうばあいもある。家庭の会話など、そうだろう。しかしそれは顔付きや身ぶり、日ごろの行動が愛を十分保証しているからである。

あの「プリーズ」といって幼子を座席に座らせた父親も、上品ぶっていったのではない。わが子を B 問六

日本語は、こうした愛にあふれているから、ややこしい敬語をもつのである。それをわずらわしいといって敬遠するとは、愛を捨てることだ。かさかさした無味乾燥なことはがふえればふえるほど、日本人は愛のうるおいを手放すこととなる。

(中西進『日本人の忘れもの』)

〔注〕プリーズ：人に物をすすめたり、たのみごとをする時などに言う語

シットダウン：座れ for me：私のために

問一 部 a・b の言葉はどのような意味で使われていますか。それぞれ選びなさい。

a 「小耳にはさむ」

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 聞くつもりがなかったことをぐう然に聞く | 2 大切なことを中途半端に聞く |
| 3 興味のあることを聞きのがさないようにする | 4 つまらないことでも聞き流さないようにする |

b 「口を切る」

- | | |
|------------|-------------|
| 1 まずあいさつする | 2 自己しようかいする |
| 3 最初に発言する | 4 議題を提示する |

問二 部『くさせていただく』という言い方はなぜ「上等」のですか。文章中の言葉を用いて四十

字以内で答えなさい。

問三 A にあてはまるものを選びなさい。

- | | | | |
|-----------|----------|-------------|-----------|
| 1 相手をもてなす | 2 相手をたてる | 3 自分をぎせいにする | 4 自分を軽んじる |
|-----------|----------|-------------|-----------|

問四 部「一部で階級と敬語が一致してしまった」理由として考えられるものを選びなさい。

- | |
|---|
| 1 階級が人と人との社会的立場のちがいにおける距離を示す点と、敬語が相手と自分とを対等な関係から引きはなして心理的な距離を生み出す点とが似ているから |
| 2 階級が人を社会的立場のちがいで集団ごとに分け個人のつながりを分断する性質がある点と、敬語が相手を大切にすると気持を表すために自分との親密な関係を断ち切る点とが似ているから |
| 3 階級が人を立場によって区分することで社会全体の秩序を守るのに有益な点と、敬語が相手に対する個人の感情をおさえることで人間関係を円かつにする点とが似ているから |
| 4 階級が人を社会的立場の上下によって絶対的な主従関係を作る点と、敬語が自分の意志とは関係なく相手を優先させ相手への従順さを表す点とが似ているから |

問五 部「尊敬の気持のない愛があったら、お目にかかりたい」とありますが、筆者はなぜ「お目にかかりたい」などという「敬語」を用いているのですか。

- | |
|--|
| 1 尊敬の気持のない愛があると知っている人はまれであることをおどろきをこめて表そうとしているから |
| 2 尊敬の気持のない愛などほんとうにあるのだろうかという疑いを遠りよがちに表そうとしているから |
| 3 尊敬の気持のない愛があるならば教えてほしいという願望を丁重に表そうとしているから |
| 4 尊敬の気持のない愛など存在するはずがないことを皮肉をこめて表そうとしているから |

問六

B

にあてはまる内容を考えて書きなさい。

問七

筆者は「敬語」とはどのような表現であると言っていますか。十五字以内でぬき出しなさい。

問八

次の各文について敬語の用い方の正しいものには○、そうでないものには×を書きなさい。

1 父はおいしそうに夕食をめし上がった

2 特急電車にお乗りになる方はこちらにお並びください

3 このカードは便利ですから、ぜひみなさんご利用してください

4 お買い上げの品はお客さまご自身でお待ちしますか

5 お宅には犬が何びきいらっしゃるのですか

6 先日はけっこうなものをいただき、ありがとうございます

問九 本文に記されている筆者の体験のように、あなたが気持のよい敬語を聞いたり話したりしたときの体験を、百四十字以上、百六十字以内で書きなさい。

「三」 次の――部1～7のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また、――部8～10の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

研究のフクサンプツとしてのエッセイ

ゲンカンの候

レンメンと続く伝統

コウシュウの面前

異をトナえる

ホガラかな人

天氣にワザワいされる

知る由もない

風下に立つ

声を競り上げる

國語

番 号	
氏 名	

問十二						問十一	問十		問七	問六	問一
							②	①			ア
									問八		イ
											問二
									問九		
											問三
											問四
											問五

[illegible][illegible]